



武士のお洒落しやれ ～黒漆塗鞘大小拵くろうるしぬりさや だいしやうこしらえ～



写真1 黒漆塗鞘大小拵 当館蔵

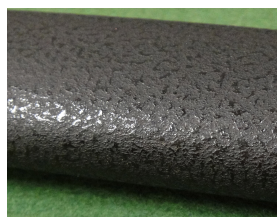


写真2 同 (鞘塗部分)

拵てらえとは、鞘さや、柄つか、鐔たばなどの刀の外装の総称です。刀身を保護しながら機能性や装飾性を加える重要な役割を担っています。

古来、拵の装飾は多様に展開し、特に桃山時代には自由で華やかな装飾を施した拵が数多く登場しましたが、江戸時代に入ると、幕府の禁令により、拵の形式に種々の規制が敷かれました。中でも、大名や旗本が登城する際の拵は、番指ばんさしあるいは袴指かばさしとも称され、現在では正式大小拵せいしきだいしやうこしらえと呼称される画一的な形式とすることが定められました。

大小拵とは、大小二口の刀の拵です。近世以降の刀剣の主流である打刀うちざと、これより短く、予備として用いた脇指わきさしを収める拵で、この二つをセットで腰に差すのが江戸時代の武士の正装の基本的なスタイルです。

正式大小拵は、刀身を収める鞘を大小とも黒漆塗くろうるしぬりとし、握り手の柄部分には白の鮫皮を巻き、その上に黒糸を巻いたものとする。また、金具類に家紋を入れること等が定められ、この他にも細かな規格があったようです。ただ井伊家歴代所用と伝わる拵を通覧すると、必ずしも規定通りでは無かった様子が窺えます。

写真の拵は、井伊家12代直亮の世子直元なほもと（一八〇九～四二）所用と伝わる品です。柄巻つかまきの糸が茶色であるなど、いわゆる正式拵の規格に則していない部分もあるものの、大小で統一した意匠で、鞘全体を黒漆で塗り、要所に井伊家の家紋の橘たちばなをあしらった金具を装着しており、正式拵の範疇に収まるものと考えられます。

一見、シンプルな黒漆塗鞘に見えますが、鞘の表面に細かな凹凸があり、絹織物の縮緬ちりめんに似た独特の風合いがあります。これは、粘りのある漆を塗り、叩いて表面に凹凸を作る皺叩塗しぼたたくぬりという技法で下地を作ったもので、その凹凸面に微細な粉を蒔い

て研ぐことで、凹部はマットなグレイトーンに、凸部は磨き上げられて艶やかな漆黒の色合いになっています。縮緬風の質感は、このような複雑な工程によって作り出されたものであり、派手さはないものの、技巧を凝らした作品といえるでしょう。

江戸時代の刀装が、他の時代と大きく異なり、また最も注目される点は、バリエーション豊かな鞘塗さやぬりです。中でも黒漆塗は、そもそも黒の色の原料も一様ではなく、鉄粉を混ぜて精製したもの、炭または墨を混ぜたものなどさまざまで、塗りの技法も、蝋色塗ろうしきぬり、石目地塗いしめぢぬり、皺叩塗しぼたたくぬりなど、極めて多様です。定番の黒塗だからこそ多彩な表現が尽くされたのかもしれません。この拵もまた、江戸時代の黒漆塗鞘に尽くされた技巧の一端を物語るものとして注目されます。

【彦根城博物館 奥田晶子】

写真の作品は、常設展「武家の備え」で6月15日（月）まで展示します（5月12日～14日は休館）。